T. S. Eliot 研究
—*Murder in the Cathedral* における Chorus の役割—

その I

宮　野　祥　子

I

この小論は先に公にした拙論（"*Murder in the Cathedral* における Becket の死の意義"，梅光女学院短期大学紀要 II，昭和40年3月）にひきつづき，"*Murder in the Cathedral*" における Chorus の役割について考察するものである。この drama のなかには Chorus が Part I に5回，Part II においても5回使用されている。論を進める便宜上 opening Chorus から，Part I の Becket の決意の直前の Chorus までを Chorus I，Chorus II，Chorus III，Chorus IV，Chorus V と区別している。テキストは先の拙論と同じものを使用した。尚紙数の関係上，今回は Part I の opening Chorus のみを取りあげて Chorus の役割について考察してみたい。

II

Chorus I は opening Chorus である。この Chorus の最初の

> What danger can be / For us, the poor, the poor women of Canterbury?
>
> . . . . . .
>
> Some presage of an act / Which our eyes are compelled to witness, has forced our feet / Towards the cathedral. We are forced to bear witness. (p. 11)

この部分においてこの drama における Chorus の役割の設定がなされていると考えられる。即ち身分は貧しい Canterbury の掃除女達であり，教会に依ってほそぼそと生きている人間としての設定がその一であり，もう一つは witness としての役割である。witness の意味は 1)Attestation of a fact, event, or statement, testimony, evidence 2)One who is or was present and is able to testify from personal observation; one present as a spectator or auditor

(O. E. D.) などである。このことから Chorus がこれから起るある出来事の spectator であり auditor であると同時に personal observation によってその出来事の事実なることを証言する役割であることがわかる。

Chorus の役割の設定の後には，ある出来事に対する予感が示されている。それには二つの態度があると考えられる。

第一には教会に依って生きる者達が自分達の生活を語ることによって，Becket が Canterbury を留守にしていた間の状況を告げること。

> We have suffered various oppression, / But mostly we are left to our own device, / And we are content if we are left alone. ……/ And the labourer bends to his piece of earth, earth-colour, his own colour, / Preferring to pass unobserbed. (p. 12)

貧しい者は貧しい者なりの智恵を用いて生きる姿である。その生活を乱されることのないようになるべく目立たないようにして，ささやかな平穏の生活を満足して守っていこうとする者達の姿である。このような者達に今何か起ころうとしている。それは Becket の帰国によってもたらされるらしい。

> New Year waits, breathes, waits, whispers in darkness. ……/ The New Year waits, destiny waits for the coming. (pp. 11—2)

それは新しい年がやってくるように，あらかじめ定められた運命のようにやってくるものであると，女達には理解されている。女達にとってどのような意味があるのかまだ明らかにされていない。ただその予感だけは確実である。その莫然とした予感が突然

> Now I fear disturbance of the quiet seasons: / Winter shall come bringing death from the sea, / Ruinous spring shall beat at our doors, (p. 12)

という今まで 'We' という主語で述べられていたものが突然強い 'I' という確信をあらわすことばで平穏な生活をおびやかす出来事が起ることを告げる。冬が死をもたらし，生命のよみがえりの春になっても何も生れてこない。そんな不毛の季節をもたらすかも知れない出来事なである。ここに到って女達はその出来事が自分達に災禍であることを知る。'Some malady is coming upon us. We wait, we wait,' (p. 13) とこの不毛の季節を救ってくれる聖者や殉教者の来ることを期待する。けれ

ども Canterbury の貧しい掃除女達にはどんなこともできない。ただ待つことしかできないのである。そしてその出来事の証言をするだけなのである。まずこのような Chorus の態度が明らかになると考えられる。

第二には 'We' という一般的発言をする主語を用いるかわりに，'I' という強調された，従って確信をより強くあらわす主語を用いて述べられる予感である。前述したごとく女達の Chorus の中に突然入りこんできて不毛の季節を予告するのもこの 'I' である。それは

> Destiny waits in the hand of God, shaping the still unshapen: / I have seen these things in a shaft of sunlight. …… / Shall the Son of Man be born again in the litter of scorn? (p. 13)

ということばで代表される。ここには女達が救いを聖者や殉教者へ期待するような災禍としてではなく，まだよくわからない，まだ真の意味の形成されていないものとして告げられている。ただそれが神の支配のもとにある運命であることだけは，むら雲のなかから輝き出る太陽の光の一条の中にみとめることができる。女達にとっては 'destiny' は 'malady' として予感された。しかしここでは 'destiny' と女達の関係を述べるのではない。それが神の支配下にあるのだと述べているからには 'destiny' そのものへの証言があると考えられる。さらに「人の子」が軽蔑されつゝ馬小屋の中に生れるとでもいうのであろうかというが「人の子」ということが，救主の苦難と再臨を意味する[1] ポジティーヴな暗示としてうけとめるならば，それは Becket のこの drama における Christ に類似した役割を暗示しているとも考えられる。しかしながら同時に「人の子」はイエスの弟子がイエスをそのように称したのではなく，イエス自身の自覚を最もよくあらわすもの[2] としてイエス自身が自らを表現することばである。そうであれば自らを「人の子」と称するような人間を期待しようとでもいうのであろうか，という意味において，逆に否定的な皮肉さのこもった期待の態度をあらわすものとなる。それは聖者や殉教者を単純に待つ女達の態度とは少し異っていると考えられる。このような意味においてこの Chorus の第一と第二の予感のなかには異質のものが存在していることを認めなくてはならない。この異質のものは最初に設定された Chorus の役割に依存するものであると考えられる。即ち第一の Canterbury の掃除女達との関係において述べられるある出来事に対する状況設定と，第二の witness としての Chorus の役割によりその出来事を見て，事実を証言するという設定とによるものである。

この Chorus の役割について D. E. Jones は Eliot が '*The Listener*', 25 November, 1936 において述べているとつたえている。それは Greek drama の Chorus の役割を copy するものではないといいながら

> But the chorus has always fundamentally the same uses. It mediates between action and the audience; it intensifies the action by projecting its emotional consequence, so that we as the audience see it doubly, by seeing its effect on other people.[3]

と述べている。これによれば Chorus によって伝えられるものが，二重の意味をもっていると判断することが許される。しかし D. E. Jones は Chorus について Eliot は 'Christian dispensation' (キリスト者に示される天の啓示)の光をあてることによって Chorus に新しい意味を与えたとしている。この天の啓示とは神によって示される和解のしるし，赦罪の行為，聖化の行為，約束の行為を意味している。それは人間が神にそむく存在でしかあり得ないのに，神の意志として人間に与えられるものであり，人間の側には何の功績もないのに，神に赦されて神に仕えることを許されることである。これにさらに 'implications of Christianity' (キリスト教における伴立，内含の関係) の考えを加えることにより Chorus を解釈している。伴立，内含の関係とは正の行為と負の行為がおのずから含まれ，暗示されていること，正の行為によって負の行為を当然の帰結として識ることである。従って Chorus には，神と人間との関係においては，神の存在の目的として赦しの対称であり，赦され得る存在である貴重な一個人が，おのずから認識され得るという意味においてその赦しにあずかる一個人の体験が強調されている。一方一個人の赦しが 'spiritual community' (霊の共同体) のなかでは神の前には人間一般の赦しにつながっているという意味において Chorus はキリストによって救われる貴重な個人の群をあらわしていると解釈している。従って Becket の死は彼等のためのものであり，Chorusは Becket という個人の宗教的体験を，人間として共通の宗教体験へと広げて伝える役目があると考えられている。かくしてその内容は作者のこの出来事に対する見方を Chorus の口を借りて述べるよりも，むしろ神の側からの人間に対する和解のしるし，赦罪，聖化，約束を前提とした，赦しの対象としての人間の罪，赦され得るが故の人間の罪の感知を述べるものであり，罪即ち赦しという同時性に基づいているものであると述べている。しかしながらこのような解釈では Chorus の内容に多少の不統一を生ずる恐れのあることを彼は認めている。そしてこのことを

> Of course, they speak with his fullness of utterance, not with the limited idiom of real 'scrubbers and sweepers.' But this 'discrepancy' is not far removed from the normal convention of dramatic poetry;[4]

と Chorus の女達は実際に設定されている立場——床をはいずり廻ってごしごし洗って掃除をするという立場上の制限を越えて，作者自身の力強い表現によって，女達

は満身の力をこめてあらんかぎりの知恵をしぼって，その恐怖感を述べている。ここには素朴な掃除女達が受けとめ得る予感としては少し不似合いなところがある。しかしこの'discrepancy' =矛盾=食違いは 'dramatic poetry' ではほぼ常套的な手段 (nomal convention) となっているのだとのべている。そこにある食違いは個人的体験を共通の宗教的体験として述べようとするからのことである。われらに共感のできる宗教的感情は普通個人の体験として表現されている感情のどん底に潜んでいるものであり，一般の人々に向って理路整然と説明のできるものではない。その宗教的感情を共通のものとして受けとめることができるのはただ 'poetic illusion' (霊感)の力によるものであると述べている。これは清烈な宗教的体験——プラスの good (正) とマイナスの good=evil (反) との弁証法的な止揚(合)=ゼロ=「空」=「無」の宗教的体験のことを云っているのであろうと思われる。この場合の「空」や「無」は唯のゼロではない。神の justification によって+goodと−goodと合せてゼロ=+2goods となる場合のゼロである。D. E. Jones は作者がこの drama のなかで観客も含めてすべての人間が一つの体験に対して共感をもち，共鳴することを期待したために止むを得ずして陥った表現上の矛盾であると判断しているようである。ここでこの drama が Canterbury 祭のために書かれたものであり，観客にもある程度の宗教的教育がなされている事を我々は認識すべきである。 Becket が殉教死したのは最初から自らの浄罪のためではなく，他の人間に神が我々の行為を義としてその罪を赦し給う意志のあることを知らしめ，さらに神への献身と浄罪への決意を促がすためであったと判断するならば，以上のように考えなくてはならない。何となれば Chorus のなかには異質のものが存在するのであり，それを 'discrepancy' として Chorus のなかに認めることは witness としての Chorus の立場を認めることであるからである。そうすると先に述べたごとく Chorus のことばを事実の証言としても考えなければならないことになる。 D. E. Jones の云うようにこれを表現上の問題と判断するならば opening Chorus のなかの異質のものを

> So, even though they recognize that what is about to happen is the design of God, they think of it as a malady, somethimg they would rather do without.[5]

と神の御心を知りつつも貧しい無知な者にはそれを神の justification (ルーテルのことば) による赦しの前提として明らかにされる事実として受けとめる気持はない。できることならおおい隠し，さけて通りたい災難としてしか理解しようとしないという解釈もできるのである。

さて John Peter はこの Chorus における二重性の意味，或は二つの異質のものが存在することについて，作者は要点を強調するために止むなく表面上の矛盾を我慢

したのだと述べている。そして 'it would not be well if he should return' という文を引用して，危険がおとづれようとしているのは Becket に対してなのであるから，Chorus 自身には危険はない。ここから Chorus の位置というものが明らかになる。そしてこのことを 'This is ambivalent' ということばで説明している。この 'ambivalent' (両面価値的) の内容を彼は

> At one level they are simply the poor women of Canterbury, immersed in the routine of existence and fearful lest anything should occur to upset that routine.[6]

一には何事も起らずにこのままの生活を続けられることを願う Canterbury の掃除女達とし，他方は

> the Chorus are transparently more than their natural selves. Like their equivalents in Greek tragedy they present a commentary on the action, anticipating and preparing us for developments.[7]

事実を透してその奥にあるものを予言しつつ舞台上の actions に対する注解をし，劇の展開を我々に告げるものであると述べている。さらに背景に流れる音楽のように劇中の行動を補いつつ，そこに生ずる危機感に心から共鳴するよう我々をしむけるものであると述べている。ここには 'I' と 'we' による分析はなされていなけれども Chorus の二つの要素は明らかに指摘されている。しかしながらこの分析がすべての Chorus についてなされているのではない。従ってこの指摘は何ら drama の本質的な意味にふれるようなものとしては考えられていないわけであり，どちらかといえば D. E. Jones の説と同様に劇的効果をあげるためのものとされている。このことは Part I の最後の Chorus で述べられる 'The Lords of Hell' は単に Becket の希望と絶望とを Chorus のことばで表現したものであると判断している[8] ことからもうかがわれるのである。しかしながら 'Shall the Son of Man be born again…' の文を Chorus の witness の役割を示すものであるとし，女達の 'clairvoyance'[9] (千里眼) の能力を指摘していることは興味深い。勿論この小論で離かめようとしていることは，大局においては劇的効果を深めるためのものである，という判断も下されるであろう。しかしこの Chorus における二つの要素は単なる劇構成のための技術の問題としてではなく，もっと本質的にこの drama を支えている要素として考えられるのではないだろうか。

即ち Chorus が掃除女達として述べる内容は Canterbury に養われている人間の

立場から，Becket によってもたらされようとしている状況について述べているのである。それは Becket の他に及ぼす影響であり，他の人間との関係における状況であり，云いかえれば Becket という人間がその内に置かれた状況なのである。一方 witness としてみつめているもの，その鋭い透察力よって見透したものは後述するように Becket の意識の内奥にある内的存在＝soul がその中におかれた内的状況であろう。Chorus のなかにある二重性はこの内的状況としての body と内的存在としての soul との両面価値性に基くものであろう。Becket の神の意志へ服従しようとする内的存在即ち soul の +x という力に対抗して，神への不服従の意志を発動させる body −x という力が現われているのだと思われる。これが John Peter のことばを借用すれば 'ambivalence'（両面価値対立）ということであろう。そして一方の極に向って，即ち神へ向っていく力 +x が強くなればなるだけ他極に向う，反対意志 −x の抵抗に直面するであろう。この相反する力の葛藤が Becket という人間を通して形象化されているのである。この葛藤が激しければ激しいほど，つまり x の絶対値が大きくなればなるほど，Becket という人間の苦悩がより大きくよりはっきりと浮び出てくるのである。その姿は殉教者ばかりではない。すべての人間の苦悶の姿である。人間の典型とも云えるのではあるまいか。Chorus の役割はこのような人間の両面価値性にもとずく conflict とこれを打開してすべての souls に自由を与えよう——（+x）+（−x）＝O を +2x に替えてわれらのたましいに自由を与えよう，そして人間の宿命的な苦しみをあわれと思召して救いの手を与えようとする神のご配慮（dispensation）への証言をすることだと私は考える。〔本誌所載の富田教授の論文をご参照いただきたい。〕

この drama の終幕の Chorus では人間はその矛盾の故に，神を否定しようとして却って〔神の方へ引きずられて〕神を識るに至るのであり，その故に〔神に義とされて〕赦しが与えられると歌われている。そこに人間存在の意味があるのである。このような Eliot の考えはこの drama の5年前に書かれた 'Baudelaire'（1930）という文のなかの——

> Satanism itself, so far as not merely an affection, was an attempt to get into Christianity by the back door.
> So far as we are human, what we do must be either evil or good, so far as we do evil or good, we are human;
> It is true to say that the glory of man is his capacity for salvation; it is also true to say that his glory is his capacity for damnation.

において明らかにされている。人間の存在というものが絶対なる者の前には死に至る

罪か或は義のどちらか――アレカ？コレカ？の選択をなすべく促迫されているのであり，そのいづれかを撰ぶことが人間に与えられた唯一の自由である。Eliot は神にそむくということも人間の実存の真実でありうる、そして神への反抗も実は神に到る裏道なのであると述べている。ここには相反する力の「対緊張」(Trigant Barrow のことば) にある人間の姿が述べられているのであり，善或は義というものをあらわすかぎりにおいて，悪の存在が認められているのである。そしてこの相対立する関係が絶対的な単一体として矛盾ではなくなる世界のあることを Eliot はかすかに識っているのである。このような Eliot の考えに基づいて Becket という人間像を考えることができる。歴史的には聖者としてあがめられている Thomas Becket を借りて人間の実存の姿を描き出すためにはこの Chorus の激しい自己分裂の矛盾を利用せねばならなかったのではあるまいか。このことはさらに残りのコーラスを分析してみることによって明らかになると思われる。

註

1. 日本基督教団出版部，聖書事典，昭37 による。p.147〔人の子〕
2. 同上 p. 146〔自意識の問題〕
3. D. E. Jones, *The Play of T.S.Eliot,* 1960 p.52
4. 同上 p.53
5. 同上 p.69
6. Hugh Kenner ed., *T. S. Eliot,* 1965 p.159
7. 同上 p.160
8. 同上 p.164
9. O. E. D. によれば (a) 催眠術にかかった状態において人間に与えられるであろうと思われる遠くにある事物や視界にないものを精神的に認知する力 (b) 精神的知覚の鋭さ，物事を日常的認知の範囲をこえて洞察することの明確さをいう。

参考文献

カール・バルト，啓示・教会・神学，井上良雄訳，昭25